



# どの子も安心して過ごせる場所になるように……

喜村 祐之

岩手県盛岡市 緑が丘学童保育クラブ 指導員

## 「ようこそ、学童保育へ」

新しく学童保育に仲間入りした新一年生のお子さんたち、そして保護者の皆さん、ようこそ！

いままで、保育所・子ども園・幼稚園、おうちとそれぞれの場所で過ごしていたお子さんが、これからは、小学校と学童保育という二か所の拠点を持つて過ごすこととなりますね。仲よしのお友達が、はやくできるといいですね。

にもできるだけお伝えするようにしています。

私が勤務する緑が丘学童保育クラブでは、二月に行われる小学校の入学説明会の前後に、入所説明会を行います。また、三月の末には入所が決まった保護者の方々に集まっていたいで、入所式を行います。

その際に、「感染症対策のために水飲み用のコップを各自用意してくださいね」など、学童保育の生活について詳細な説明を行うとともに、「この小学校は、朝の集団登校を行っています。子どもたちは、集団登校、小学校のクラス、学童保育と三つの新しい人間関係を同時進行でつくりはじめることになります。おうちの方は、ゆつくりと対応していただければありがたいです」ということも、あわせてお伝えするまようになっています。

新一年生のお子さんたちのなかには、保育所・子ども園・幼稚園の年長さんとしての生活から、新しい環境である小学校や、学童保育での生活に変わることに対して、期待とともに不安を感じる子もいるのではないのでしょうか。

そして、指導員にとって二月から五月頃までの時期は年度の変り目で、卒所する子を送り出すのと同時に、新一年生の子を迎え入れる時期として、保育の面でも、事務仕事の面でも、日々追われるような感覚を

## “二二の子”へ

子どもとの関わりでは、新一年生には「安心して自分の思いを出していい場であること」、上級生には「仲間として受け入れていくこと」を伝える働きかけを積みあげるよう心がけています。はじめは「緊張したお客さん」のような表情をしていた新一年生が、自然な笑顔を見せてくれるようになったら、もう一息です。

四月の後半になると、午後まで過ごす本格的な小学校生活が始まります。また、この時期には運動会の練習も始まり、「今日の練習で、ぼく一番だった」「ぼくのほうが、速いよ」「ちがうよ。ぼくだよ」などという言い合いが聞かれたりもします。

こうした言い合いがはじまると、

うれしく思います。

\* \* \*

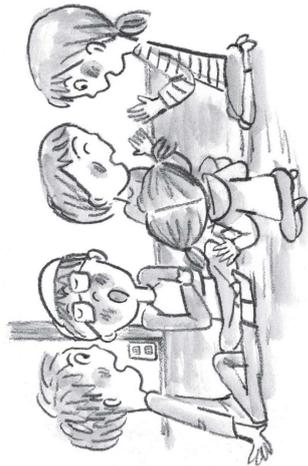
学童クラブは、ただその時間、預かるだけの場ではなく、「子どもたちの生活の場」ですので、友達との関わりや、自らの世界を広げていくなかでは、壁にぶつかることや失敗することもあるでしょう。子どもたちはそんな経験を積み重ねながら、自分のこと、まわりの人たちのことを知り、成長していきます。

子どもたちの育つ力を信じて、保護者の方々とつながりを持ちながら、長い目で共に見守っていきたいと考えています。子どもたちや保護者の皆さんにとって学童クラブが、たくさん笑顔あふれる居場所となりますように……と願っています。

\*長岡県市内の小学校で通学時に使用しているリュックサック

おぼえます。

そうした日々でも、一人ひとりとやさしいトーンで話し、接するよう意識して、期待と不安を感じている新入所の子どもたちに「学童保育はホッとできる場だよ」「指導員たちは安心できる存在だよ」と感じてもらえるよう、心をつくします。そして、そのことを保護者の皆さん



私はホツとするのです。それは、新たに入所した子どもたちにとって、学童保育が「お客さんとして訪問している場所」から、「自分にとって生活する場所」に変わりはじめた兆しだと感じるからです。

## 「聞いていたので、あわてずに対応できました！」

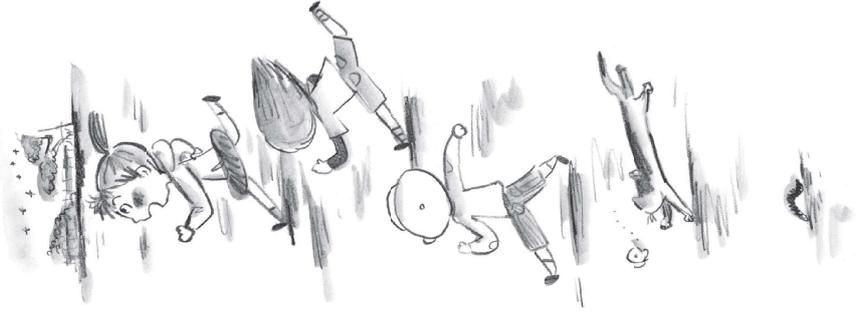
入所の際に保護者の方々に必ずお伝えすることがもう一つあります。それは、「なんで、学童に行かなくていけないの？」とか、「学童に行きたくない」ということを、どの子ども言うということ。そして、「指導員が気づかないうちにつらい思いをしている場合もあり得るので、家での様子を教えていただけるとありがたい」ということをお伝えしたう

です」と話してくれました。保護者の方に、保育のなかでの出来事を伝えていねいにお伝えすることとあわせて、ときには見とおしについても、お伝えしてよかったですと思いました。

## 指導員の打ちあわせを大切に

指導員が複数で子どもたちを保育するうえで、子どもたちの具体的な事実を共有していくことが欠かせません。緑が丘学童保育クラブでは、毎日、子どもたちが学校から帰ってくる前の時間帯に、その日の予定確認に加えて、前日の子どもの様子と指導員の関わりを情報共有する打ちあわせを、短時間勤務の指導員も一緒にに行っています。

「どの子どもたちとどのように関わったか」という事実を、指導員全



えで、なぜどの子ども、というのかを説明します。

子どもたちは、小学校の生活のなかで「同じクラスで仲よじになったAちゃんとBちゃんが楽しそうに一緒に帰る約束をしているときに、自分はその子たちから離れて学童保育に帰っていくのは、なぜなんだろう」「隣の席のじちゃんのお母さんは働いていない。そんな家があることを発見した」などと世界が広がってきます。

員で毎日話すこととあわせて、それぞれが感じたことや悩んだことも語りあいます。

全員が必ず発言する打ちあわせを毎日重ねていると、ある指導員が話題にした子どものことについて、ほかの指導員から情報が追加されたり、新たな視点からの意見が出されたり、本誌や研修で得た知識も紹介されたりするようになります。

ある年の夏、全日保育期間が終わる頃の出来事です。一年生のスズちゃんのお母さんが、深刻な表情で相談にいらつしやいました。「家でスズが、『アミちゃんがいつも意地悪をするから、学童をやめたい』と言っているの、退所させたい」と言うのです。

日々の指導員の打ちあわせでは、同級生のアミちゃんがスズちゃんの

朝に保育所・子ども園・幼稚園に行き、迎えが来るまでそこで過ごすのが「あたりまえのこと」になっていた子どもが、小学生になつて同じように過ごすことに疑問や抵抗を感じる……。これは、その子の世界が広がり、いろいろなことを感じるようになってきた成長の証ともとえられると思います。

あるお母さんは、「入所式のときに聞いていたので、あわてずに対応できてよかった。でも、本当に言うん

ことを気に入っている様子を伺えていました。そのことをお母さんに伝えたら、指導員に対応を任せていただけないか……と願っていると、不安ななかだつたと思いますが、了承していただきました。

その後の指導員の打ちあわせのなかで、「アミちゃんはスズちゃんのことを気に入っているようなのに、スズちゃんは、意地悪をされていると感じるのはなぜなんだろう。どこに気持ちのずれがあるのだろうか」について考えながら様子を継続的に見ていこうと話していました。

その後、様子を見守っていると、一緒に遊んでいるときにスズちゃんがほかの子のところに行こうとしたり、別の遊びに変えようとしたりするタイミングで、アミちゃんが「一緒に遊ばないとダメなんだよ」など





と強い言葉をかける様子が見えてきました。

「ほかの子と仲よく一緒に遊ぶのはいいこと」というのは一年生の子どもにとっては疑う余地のないことでしょう。アミちゃんの強い言葉によって、スズちゃんはほかの子と遊んだり、別の遊びをしたりという自分がやりたいことを選べなくなり、つらくなっている。そのことを表す言葉として「意地悪」という言葉を使っているのではないかと想像しました。

そこで、二人と一緒に指導員が話をすることにしました。

嘉村「アミちゃんは、仲よく一緒に遊ぶのがいいことだと思って言ってるでしょ」

アミ「うん」

嘉村「それはそうだよね」「で、さ

スズちゃんの主人公って、誰だと思っ？」「スズちゃんの主人公って、アミちゃんかな？ スズちゃんかな？」

アミ「スズちゃんの主人公は、スズちゃん」

嘉村「アミちゃんの主人公は、アミちゃんだもんね。だとしたら、スズちゃんが誰と遊びたいとか、なにをして遊びたいかを決められるのは、アミちゃんじゃなくて、スズちゃんじゃないかな」

そばで聞いていたスズちゃんは、この話しあいの後、自分のことを自分で決めていんだと安心して、アミちゃんと一緒に遊んだり、ほかの子と一緒に遊んだりしながら学童保育で過ごすようになりました。

ほかの子と仲よく過ごすことも、主体的に過ごすことも、どちらも学

童保育の生活のなかで大切にしたいことです。スズちゃんは、大切なことと大切なこととの狭間で身動きができなくなっていたのです。

\* \* \*

このように、指導員同士のチームプレーができるようになると、どの指導員も子ども一人ひとりの様子がある程度わかり、安心して、どの子ども関わりを築けるようになります。放課後の生活の場である学童保

育で、指導員が安心感を持ち、ある意味「肩の力が抜けている」ことは、「子どもたちがストレスを感じている度合いが高い」と言われている日

本の状況を見るととても大切なことだと感じていて、そのような指導員のチームとなるように、心にとめておきたいと思っています。

# 少しずつ成長していく 息子たちと共に

宮下由紀  
兵庫県芦屋市 保護者

## 学童保育に出会って

わが家は主人と私、そして小学三年生と一年生の男の子の四大家族です。夫婦共にフルタイム勤務、週末になると子どもたちは小学校の野球チームで練習や試合と、あわただし

日々をおくっています。今回はいつもお世話になっている学童保育に通いはじめた頃から、これまでをふり返ってみます。

長男が小学一年生になったのは、二〇二〇年春。「新型コロナウイルス感染症」が拡大しはじめた時期で、保育所の修了式も卒園証書をいただ

くお式のみでしたし、小学校の入学式も校庭で式典だけが行われ、その後、二か月の学校「臨時休業」となりました。

六月に入ってから、学校生活と学童保育での生活がようやくはじまったのですが、息子が通っていた保育所から同じ小学校に通うお友達は四人だけ。休校中はしばらく祖父母の家で過ごすことが多かったことも手伝つか、最初の頃は、知っているお友達が学童保育をお休みしている日は「行きたくない」と泣いたこともありました。

それでも、一か月もしないうちに新しいお友達とも打ちとけていき、私もほつとしたのおぼえています。それからは、勉強をはじめ、日々学校で起こるさまざまな新しいことを学び、友達もできて、学校も学童保育も楽